

## アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における母親観 ——（２）アドネにとっての理想の母親像

川口 陽子

### ２．ベルトの母親代わりとなる女性達

興入れのために親元を離れたベルトは、祖国出立後、即、大人の庇護を全く必要としなくなるわけではない。物語の最後でペパンに見出され、正式なフランス王妃に納まるまでの間、森での彷徨期間を除いて、彼女は常に両親以外の誰か大人の支配下または庇護下にいる。これらベルトを支配または庇護する者達は、あたかもベルトの養い親であるかの如く描かれる。その人物達とは、老奴隷女マルジストと、森林監督官シモンとその妻コンスタンスである。マルジストは、ハンガリーからフランスまでベルトに付添い、指導者として彼女に助言を与える。しかしその助言は虚偽のものであり、ベルトを苦難へと導くものだった。一方シモンとコンスタンスは、森を一人で彷徨っていたベルトを暖かく迎え入れ、彼らの娘達と共に分け隔てなく慈しむ。このように彼らは、共にベルトの指導者的・保護者的立場にありながらも、ベルトに対して取る態度や行動、彼女に対して抱く感情という点において大きく異なっている。以下では彼らのうち、ベルトの母親代わりとなったコンスタンスとマルジストを取り上げて比較し、二人の相違点を明らかにすることを通して、養母・継母の在り方に関するアドネの考え方を探る。

#### 2-1. コンスタンス——良き養母

ル・マンの広大な森の中で疲労、空腹、寒さに苦しんでいたベルトに出会った森林監督官シモンは、彼女がひどく泣いていることに大きな哀れみを抱き、

声をかけ、彼女の身の上話に耳を傾け、自分の館に連れ帰る (vv.1163-1215).  
 そして、帰宅したシモンは大声で妻コンスタンスを呼び、ベルトの面倒を見るように、寒さと空腹に苛まれた彼女の回復に気を配るようにと言う (vv.1216-1226). こうしてベルトは、この「賢明で良き知性を有する女性」(v.1217) コンスタンスの手に委ねられることになる。既に 1-3 で見たように<sup>(1)</sup>、シモンの家では母コンスタンスとその娘達の絆は強く、母親が娘達の保護者にして指導者という役割を担っている。したがって、若い娘ベルトが家の女主人であるコンスタンスの庇護下に置かれることは、この家においては至極自然なことだったと理解される<sup>(2)</sup>。

夫シモン同様、コンスタンスもベルトを大層哀れみ、涙を流し、彼女を自分の部屋に連れて行き、火の側に寝かせる (vv.1230-1231). シモン、コンスタンス、そして彼らの娘達は、ベルトの身体を温め (v.1233, vv.1259-1260), 彼女の心を和ませるように努め (v.1244, v.1276), 彼女に食べ物とベッドを用意する (vv.1261-1262, v.1323). 更に、コンスタンスはベルトに対して、一月の間、彼女の望むままに館を提供し、求めるものは何であれ、拒まれることはないと約束し (vv.1348-1349), 彼女に対して憎しみを抱いていないこと、彼女の立派な教養の故に、自分の娘達以上に彼女を愛していることをはっきりと示す (vv.1378-1379). このように、「純な心を持つコンスタンス」(v.1355)は「真の完全なる心で」(v.1359)ベルトのことを考える。そして共に暮らす中、コンスタンスとその娘達は、ベルトを引き留めたい、彼女と離れたくないと思うようになる (v.1390-1408). 「さあ、私の保護の中にすっかりと身を委ねるのです」(v.1416), このコンスタンスの台詞は、3 人目の娘としてベルトを受け入れたことを告げる言葉、彼女の保護者となるという宣言である。こうしてベルトは、シモンの「姪」(v.1454) としての地位を与えられ、彼の家に居場所を見つけ、結婚前の、大人に庇護された娘として、ペパンに見出されるまでの9年間を過ごすことになる。そしてその間、ベルトは彼らの実の娘達と共に、優しさ、親しみ、愛情に包まれて育まれるのである (v.2629, vv.2790-2792, v.3152). 森で出会ったベルトを、正体を知らぬまま、力づくで奪おうと欲したペパンに対するコンスタン

スの怒り (vv.2793-2801) には、このような彼女の、ベルトの保護者としての責任感が表れていると言えるだろう。

以上のように、コンスタンスは、夫シモンと共に9年もの間、ベルトの本当の身元を知らぬまま<sup>(3)</sup>、彼女の養い親という役割を引き受けていた。しかも、彼女のベルトに対する接し方は、第1章で纏めた母親達の役割——「愛情を持って子に接する」、「保護者として、指導者として、子に対する責任を負う」<sup>(4)</sup>——に等しい。したがって、「完璧な『賢明な女性 (preude femme)』」<sup>(5)</sup>とR・コリオ (1970)から形容されたコンスタンスは、養女を、どのような巡り合せによってであれ、一旦その保護を引き受けたならば、実の娘達と分け隔てなく慈しむ、「良き養母」でもあったのである。この印象は、ベルトがシモンとコンスタンスに対して抱く感謝の念によって強められることになる<sup>(6)</sup>。更には、「母の愛は義務であり、女性ならば皆、自分の子であろうとなかろうと、自分に託された全ての子達に対して、母としての姿を示すことが出来なければならない」<sup>(7)</sup>というD・D・ベルクヴァン (1981)の指摘を鑑みれば、それを実践したコンスタンスは「理想的な養母」であったとさえ言えるだろう。

## 2-2. マルジスト——悪しき継母

以上で見てきたような「良き養母」コンスタンスと並んで、彼女と対極をなす女性が物語には登場する。それは裏切り者の老奴隷女マルジストである。

まず、コンスタンスが自ら進んでベルトの養母としての役割を引き受けたのに対し、マルジストはベルトの両親から彼女を託された「乳母」(v.2216)である<sup>(8)</sup>。ところで、中世の貴族達、裕福な者達对孩子に対して負う義務は、その子の世話を引き受ける人物の選択に責任を持つということだった<sup>(9)</sup>。この点を鑑みれば、マルジストがベルトの両親からいかに信頼されていたのかが理解される。特にベルトの母、ハンガリー王妃ブランシュフルールは、彼女のお金で、マルジスト、その娘アリストと彼女達の縁者チペールを買い戻し、奴隷身分から自由にした (vv.189-190)。コリオ (1970) も指摘するように、このような「奴隷身分からの買戻しは、元奴隷の側からの無条件の忠誠をもたらす」<sup>(10)</sup>はずで

あった。それだけに一層、ブランシュフルールは彼らを信頼し、フランス王の下に嫁ぐ娘に彼らを付添わせたのである(vv.185-191)。ベルトのほうもまた、母親がこれほど信頼しているが故に彼らを愛し、自分のものなら何でも彼らに与え、個人的な問題は全て彼らの助言により行うことにすると母に約束するのである(vv.192-194)。このようにマルジストは、アリスト、チベールと共に、王妃ブランシュフルールに対して多大な恩を負っており、信頼されているが故に、王女ベルトに忠誠を尽くさねばならぬ立場にある。それにも関わらず、彼女はベルトに偽りの助言を与え、彼女を上手く丸め込み(vv.311-336)、自分の娘とすり替え(v.386)、更には、確実に亡き者にしようとさえ企む(vv.498-499, vv.545-546)。それ故に彼女の裏切りは許されざる犯罪なのである。

既に1-2で見たように<sup>(11)</sup>、マルジストもまた娘を愛する母であった。しかし彼女は、娘を幸福に、裕福にしなければならぬという思いから、娘の行動が道徳的に誤っていようと、娘が裕福になるのであればそれを諫めようとせず、むしろそれを助長さえした。そしてまた彼女は、娘を守らなければならないという責任感から、ベルトやブランシュフルールを亡き者にする計画を企む犯罪者となってしまった。このように彼女は、「理想的な母」であるブランシュフルール<sup>(12)</sup>の取った道とは反対の方向へを進んでいった。そのような彼女が養母として歩んだ道は、「理想的な養母」コンスタンスが歩んだ道と逆方向のものであった。したがってマルジストは、自分の娘しか愛することの出来なかったが故に「悪しき母」であると同時に「悪しき養母」ともなったと考えられるのである。

J・ファーボルク(1997)は、継母達とは恐れられべき者である、少なくとも、世話をしなければならない子達に対して、母親としての愛情を抱くことが出来ない、悪意ある存在であると見なされていたことを示す例が、中世の作品中には数多くあると言う<sup>(13)</sup>。D・レット(1997)は中世の残酷な母親として聖女と継母を挙げ、後者に関しては、「中世初頭以来、継母は常に大いなる残酷さを備えた人物である」<sup>(14)</sup>と述べている。ベルクヴァン(1981)もまた、夫の非嫡出子を引き取り、自分の子の如く世話をする、賛嘆すべき献身的態度を見せる継母がいる一方で、より多くの場合、子を持つ女性達は、夫と他の女性との

間に生まれた子達を貶め、自分の子のために彼らから相続権を奪おうとすると指摘する<sup>(15)</sup>。しかしベルク ヴァン (1981)は、「このような態度は常に非難され、排他的で嫉妬深い母の愛は母親にとって言い訳にならない」<sup>(16)</sup>と続けている。マルジストのベルトに対する裏切り行為はこれらの継母達の姿を連想させる。しかもその印象は、ベルトがシモンに対して咄嗟に作り上げて語った偽りの身の上話の中に、彼女を痛めつけたという継母が登場し<sup>(17)</sup>、その女性の姿にマルジストの姿が重なることにより、一層強められることだろう。

このように、ベルトの母親代わりとしてのマルジストは、実の娘だけに愛情を注ぎ、託された娘ベルトを愛さない。それどころか、指導者的立場を悪用し、偽りの助言を与えることで、彼女を不幸へと突き落とす。要するに、ベルトの指導者・保護者としてのマルジストは、「良き養母」コンスタンスとは対照的に、母親が実の子達に対して担っていた役割を何一つ果たしていない。この点において、彼女はベルトにとって「悪しき継母」であったのである。

以上のようにこの物語では、養母の在り方の両極を体現する女性達が対照的に描かれている。一方には、養子に対しても「愛情を持って接する」、「保護者として、指導者として、責任を負う」、つまり実子に対するのと同様の母親としての役割を担う、良き養母、理想的な養母としてコンスタンスがいる。他方には、養子に対しては愛情を抱かず、養子を保護し指導するどころか、不幸に陥れ、亡き者にしようとさえ企てる、つまり養子に対しては母親の役割を一切担わず、実子のことのみを考える、悪しき継母としてマルジストがいる。前者はアドネにとっての「理想の養母像」が「理想の実母像」に等しいことを示し、後者は反面教師として、「理想の養母像」＝「理想の実母像」というイメージを補強している。

ところで、ベルトにとって養母と見なし得る、これら二人の女性達の相違点は、一体、何に由来しているのか？マルジストを「犯罪」<sup>(18)</sup>の象徴と見なすコリオ (1970)は、ブランシュフルールにより奴隷身分から買い戻され、自由であるにもかかわらず、彼女とその娘が徹頭徹尾「奴隷女」と呼ばれ続けることに

注目し、「奴隷という素性が、道徳的欠陥に結び付けられた、消すことの出来ない、卑劣さという染みを構成しているように思われる。(……) このように奴隷身分に生まれたことが、二人の女性の運命に付纏っている」<sup>(19)</sup>と考える。しかし果たして、マルジストの裏切りは、このような奴隷身分に由来する、彼女の悪しき性格からのみ来るものなのだろうか？この問いは、コンスタンスとマルジストの相違は何に由来するのかという、先に挙げた問いとも関連しているように思われる。したがって次に、コンスタンスとマルジストが置かれた境遇を比較し、それを通して、何故、彼女達は異なる運命を歩むことになったのかについて考察する。その中で、マルジストは何故ベルトを裏切ったのかという問いに対する答えも同時に見えてくるだろう。

### 3. マルジストは何故ベルトを裏切ったのか？

#### 3-1. コンスタンスとマルジストの境遇に関する相違点

ベルトにとって養母と見なし得る二人の女性、コンスタンスとマルジストが置かれた境遇は、以下の点において異なっている。

1) 社会的地位の相違：コンスタンスは森林監督官の妻である。ところでコロオ(1970)は森林監督官シモンについて次のように指摘する。13世紀の「森林監督官 voier」の意味するところは現代語の「下級裁判所裁判官 *viguier*」に非常に近く、彼は領主の代理であり、時には伯の代理として法廷を開き、行政の調整を任されており、その機能は「森林管理人 *forestier*」の機能であった。したがって森林監督官シモンとは比較的重要な役人 (*fonctionnaire d'importance moyenne*) であり、森の一部の監視を任せられ、王のために田園領域を管理し、宮廷の地方滞任時には食糧、物資の供給 (*ravitaillement*) に従事する、国王代官 (*intendant royal*) のような人物であった。しかも彼は従僕や侍女をかかえており (v.3239)、彼の娘達は金銀の刺繍に勤んでいる (v.1381)。要するに彼とその一家は裕福なブルジョワなのである<sup>(20)</sup>。このような彼らは、貴族ではないので社会的に最上層に属しているわけではないが、決して社会的に下層に属する者で

はなく、むしろ比較的豊かな階層に属する者と見なすことが出来る。それに対しマルジストは、絶えず奴隷女と呼ばれ続けることで社会的階級の最下層に位置し続けることになる。

2) ベルトとの関係の相違：シモンの家でのベルトは、王女でも王妃でもなく、保護された娘に過ぎない。したがって、コンスタンスはベルトの女主人である。つまり、少なくともベルトの身元が判明するまでは、コンスタンスのほうがベルトよりも社会階級的に上位に位置していると言える。それに対しマルジストは、ベルトの母から彼女を託されたとはいえ、奴隷身分から買い戻された使用人にすぎない。つまり、保護者的・指導者的存在とはいえ、マルジストはベルトより社会階級的に下位に位置しているのである。

3) 実の娘を成り上がらせるための条件の有無：コンスタンスはベルトがハンガリー王女にしてフランス王妃である事実を知らない。したがって彼女には、ベルトを貶めて、自分の娘達を社会的に上昇させたいと願うようになる可能性は全くない。それに対し、マルジストの娘アリストはベルトによく似た美女であり (vv.186-187)、ベルトの祖国から遠く離れたフランスには二人をはっきりと識別出来る者がいない。したがってマルジストは、自分の娘をベルトとすり替え、偽王妃に仕立て上げる、つまり社会的最下層から最上層へと上昇させる計画を実行することが可能な状況にあった。要するに、娘を成り上がらせる動機と機会がマルジストには十分にあったのである。

以上が物語の中で実際に語られた、コンスタンスとマルジストの境遇の違いである。これらの相違点から次のように推測される。社会的階級が比較的高く、またベルトの本当の身元を知らないコンスタンスが、実の娘達を成り上がらせたいという野心を抱く可能性は全くない。むしろ彼女はベルトの不遇を哀れに思い、それ故に彼女は自身の娘達を慈しみつつ、かつ同時にベルトにも愛情を注ぐことが可能であった。一方、社会的に最下層に位置するマルジストは、実の娘の幸せを強く願うあまりに、結局、社会的に最上層に位置するベルトを心から愛することが出来なかった。確かに、ハンガリー王妃から厚い信頼を受けていた頃、マルジストが王女ベルトのことをどのように思っていたのかは不明

である。しかし少なくとも、社会の最下層に属するが故に娘の社会階級の上昇を娘の幸福と考えていたところへ、娘をベルトとすり替え、偽王妃へと成り上がらせる可能性が出てきた結果、ベルトを邪魔者と思うようになり、彼女を裏切り、亡き者にしようと企てるに至ったと推測される。要するにハンガリー出立後の以上のような状況が、マルジストのベルトに対する憎しみを膨らませ、彼女を犯罪へと駆り立てていったと考えられるのである。

しかし、これらに加えてもう1点、コンスタンスとマルジストの境遇には違いが見られる。それは、コンスタンスの夫シモンが物語に登場するのに対し、マルジストの夫に関する言及が全くなされていないという点である。次にこの点について考察する。それは、これもまた、二人の運命を分かち重要な分岐点であるように思われるからである。そしてその後、マルジストは何故ベルトを裏切ったのか、その理由について再検討する。

### 3-2. マルジストの夫の不在

中世の女性達は一生の間に3人の主を持つ。それは結婚前の父、結婚後の夫、そして夫亡き後の長男である<sup>(21)</sup>。中でも夫婦関係に関して言えば、日々の生活では行使出来る力を妻がかなり有していたとしても、法的には夫のほうに妻に対する強い権限が与えられていた。よって、夫婦間には明確な上下関係——夫は妻の主であるという関係が存在しており、規範的なテキストに登場する妻達は夫に従順で、もしこのような従属を受け入れない場合には厳しく罰せられていた<sup>(22)</sup>。この物語においても、例えばシモンの家では夫シモンが家族の中心に位置し、妻コンスタンスに指示を出し、妻は夫の下で家のこと、娘達のことに従事しているように見受けられる。

しかしマルジストに関しては、彼女の夫にしてアリストの父親である男性に関する言及が一切なされていない。換言すれば、家族の中心となるべき男性が不在なのである。彼女にはチペールという男性の縁者がいるが、その彼とてマルジストの上に立つことはない。3人の裏切り者の中、唯一人の男性である彼でさえも、共犯という点において彼女と同等、むしろ彼女の指示に従っている

という点において彼女より下位の人物にすぎない。その結果、この家族の中心に位置するのは女性であるという印象が残るだろう。だがこれは、上で述べたような家の主は男性であるという社会において、非常に特異なケースなのである。

マルジストの夫がどうなったのか、それは知る由もない。だが、ハンガリー王妃から厚い信頼を寄せられていた彼女の姿は寡婦のイメージを髣髴とさせる。カトリック教会にとって、夫の死後、再婚せずにご過す寡婦の期間は結婚生活を購う期間、結婚状態において歓迎される終章であり、聖職者達はこぞって再婚しない妻の価値を高めた<sup>(23)</sup>。ところでマルジストは、ベルトを裏切るという欲望に捕えられて以来礼拝を最後まで聞くことが出来なかった (vv.1551-1555) とはいえ、礼拝に出席したことはあった。また彼女は、キリスト教の神、聖母、聖人達に保護を求めたり、その名にかけて誓ったりしている<sup>(24)</sup>。これらの点から彼女はキリスト教徒であったと推測される。したがって、もしハンガリーでのマルジストが寡婦状態にいたとすれば、当時の彼女は敬虔な女性であったということになり、それは彼女が王妃から厚い信頼を受けていたことと矛盾するどころか、強力な根拠の一つとさえなるだろう。

家族の中心に位置する母マルジストは、夫の不在故に、夫が担うはずだった父親としての役割も兼ねなければならなくなる。第1章において、「娘の社会的階級を表す存在」という本来父親達が担うべき役割<sup>(25)</sup>を母親であるマルジストが担っていたことを指摘したが<sup>(26)</sup>、それは、夫の不在という彼女に固有の特殊な状況が彼女に課した役割だったのである。こうして夫に代わって家族の中心に位置するようになった結果、彼女は父親が娘に対して引き受けるはずだった役割をも引き受けざるを得なくなったと考えられる。

母としての責任と父としての責任——片親の上に押し掛かった二親分の重圧。寡婦として敬虔に暮らしていたであろうマルジストにとって、それは過多の負担となった。今は亡き夫の分も娘の将来の幸福に対して責任を果たさねばならぬという強い思いが、母マルジストに人の道を踏み外させた。いかなる手段によってであれ、社会的に上昇し裕福になれば幸福になれると考えた母親は、娘

のためならば犯罪にさえも手を染める、人として進むべき道を誤った悪しき母となり、それと同時に、託された子を愛さず不幸へと陥れる悪しき継母と化したのである。要するに、元奴隷という社会的地位の低さ、娘の成り上がりの可能性に加えて、夫の不在に端を発する親としての重圧がマルジストを裏切りへと駆り立てたのである。

マルジストの夫の不在とそれに関連することについて、テキストは何も語っていない以上、憶測の域を出ることはない。しかし、母にして養母でもあるコンスタンスとマルジストという二人の女性が置かれた境遇を比較する時、特殊な状況が悪しき母、悪しき継母を生み出すのだということは少なくとも考えられるだろう。そこから更に推測の域を広げ、もしマルジストがハンガリー王妃の下に留められていたとすれば、彼女は王妃への恩を忘れず、娘を偽王妃に仕立て上げるという野心も抱かず、したがって悪しき母とも悪しき継母ともならず、敬虔な生活を送ったことだろうという結末は想像に難く無いだろう。何故ならば、「寡婦は、中世の原資料において、継母を反転させたイメージである」<sup>(27)</sup>からである。

### おわりに

この物語においてアドネ・ル・ロワが描き出す母親達は皆、実母・養母の区別無く、「愛情を持って子に接する」、「保護者として、指導者として、子に対する責任を負う」という役割を要求されている。そして、課された義務を果たす母親達は良き母、理想的な母とされ、一方、それに反する母親達は悪しき母、反面教師的な母と見なされる。更に、これら悪しき母親達は犯罪に手を染める悪しき人でもある。このように両者が対照的に描かれることで、一方では良き母の姿は更に輝きを増し、他方では悪しき母の残虐な印象が強まることだろう。しかし、悪しき母と化するのは特殊な境遇の女性に限られていた。換言すれば、特殊な状況が悪しき母を生み出すことになったのである。この点から、特殊な

状況に陥ることが無ければ、女性達は皆、良き母を目指すことになるはずだという、語り手の考えが浮かび上がってくるように思われる。

アドネ・ル・ロワは『大足のベルト』の登場人物達を非常に巧みに練り上げている。登場人物達の描写に関しては、「はじめに」においても挙げたように、A・アンリ (1982) が、アドネは「全ての役者達、端役達でさえも、その運命を徹底して調整することに執着している」<sup>(28)</sup>と述べている。またコリオ (1970) も、『大足のベルト』の中心人物達は、道徳的、宗教的諸価値全体を具現化している<sup>(29)</sup>と指摘する。このような微に入り細にうがった登場人物達の構築は、本稿における分析により、母親達の描写に関しても同様になされていることが明らかとなった。良き女性は良き母・良き養母となり、幸運を手に入れるが、悪しき女性は悪しき母・悪しき継母にしかなり得ず、罰せられることになる。このようにアドネは、母親達が有するあらゆる側面が矛盾をきたすことのないように配慮しつつ、母親という立場に置かれた女性達を描きあげたのである。

確かに、このような母親達の姿は、アドネの眼を通して見た、子供に対する母親達のあるべき姿、またはあつてはならぬ姿、要するにアドネにとっての理想の母親像、あるいは反面教師的な母親像を提示しているにすぎず、中世の母親達の実像を伝えるものではないだろう。しかしそれでもやはり、彼女達の姿は、確かに我々に、中世の母親達がいかに子供を慈しみ、どのように子供に接していたのかを垣間見せてくれるものであることには違いない。したがって、親達が登場する中世物語作品が少ない中、西欧中世の母親観を伝えるものであるという点において、この物語は貴重な作品なのである。

## 注

本稿は、「アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における母親観——(1)母親達の役割」(in 『年報・フランス研究』第39号、関西学院大学フランス学会、2005年、pp.35-47)の続稿である。これらは、2004年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会(2004年11月27日於神戸大学)における口頭発表「アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における「親」」に修正加筆したものである。

(1) Cf. 拙稿、「アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における母親観——(1)母親達の役

- 割], in 『年報・フランス研究』第39号, 関西学院大学フランス学会, 2005年, p.41
- (2) 中世の城主の娘達は, 結婚までは母親の完全な支配下で成長し, 針仕事を習うと言う\*。確かに, ペパンにより騎士に叙任される(v.3175)以前のシモンは貴族ではなく, 裕福なブルジョワにすぎない。しかしコリオ(1970)も指摘する通り, 彼は良き教養を身に付け, 地所の広い屋敷を有し, 領主の如き品性さえも備えている。彼の家の者達は, 主人の命令の下, 階級制の中で暮らす集団を形成している。妻コンスタンスの部屋は女性達の仕事のための閨房のようであり, そこでは娘達が金銀の刺繍に勤しんでいる\*\*。このようにシモン一家は, ブルジョワとはいえ, あらゆる点において貴族に匹敵していた。それを鑑みると, 母親の下での娘達の教育もまた, この一家に貴族的な印象を与えるものであり, この一家に特有のものでは決してないと考えられる。更に言えば, 家の女主人コンスタンスとその下に置かれることになった未婚の若い女性ベルトの姿は, 貴族の奥方と彼女に仕える侍女である乙女, あるいは, 城主の奥方と結婚前の彼女の娘という関係を想起させることだろう。Cf. Danièle Alexandre-Bidon, « L'enfant dans la vie sociale (XII<sup>e</sup>-début du XVI<sup>e</sup> siècle) », in Danièle Alexandre-Bidon, Didier Lett, *Les Enfants au Moyen Age, V<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles*, coll. <La Vie Quotidienne>, Hachette, 1997, p.207. / \*\* Régine Colliot, *Adenet le Roi « Berte aus grans pies »*, *Etude littéraire générale*, tome II, Editions A. et J. Picard, 1970, pp.144-149.
- (3) ベルトはシモンとコンスタンスに偽りの身の上話をする。そのためこの夫婦は, 彼女が良家の出であると確信しつつも, 彼女の正体を知らぬまま, 9年間彼女を保護し養った。彼らが彼女を愛したのは, 決して彼女の社会的地位の故ではなく, 彼女の善良さの故なのである(v.2791).
- (4) 拙論, 前掲論文, p.42.
- (5) Régine Colliot, *op.cit.*, p.142.
- (6) Cf. 「マリア様の御子息であられる神にかけて, /こちらが私の優しい奥様です, この方は私を優しく育てて下さいました, /そして, こちらが私の御主人様です, この方にイエス様の祝福があらんことを, /この方が, 古い森の中で一人きりでいる私を見つけて下さいました。/ (私には) よく分かっております, もし彼がいなかったならば, (私は) 死んでいたか, 食べられていたことでしょう;/神に続いて, 彼らによって, (私は) 死から守られたのです, /お知り下さい, もし彼らがいなかったならば, (私は) 生きてはいなかったでしょう」(vv.3151-3157).
- (7) Doris Desclais Berkvam, *Enfance et maternité dans la littérature française des XII<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles*, coll. <ESSAIS>, n° 8, Champion, 1981, p.119.同頁では, コンスタンスのペパンに対する言葉「(私は) 自分の子達以上に彼女(=ベルト)を愛しています」(v.2792)に関して, 「これは彼女の感情的能力の証拠であって, 母としての琴線が欠如したという証拠ではない, ベルトがあらゆる点においてコンスタンスの娘達を凌駕しており, 愛されるに値するだけに尚更である」と指摘されている。
- (8) アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』に着想を得て, 15世紀に匿名散文作家によって残された『ベルト王妃とペパン王の物語』におけるマルジストは, フランス人で, 高貴な家の出であったが故に, その娘アリスト, その甥チボーともども, ベルトの

父フロラン王により奴隷身分から買い戻され、ベルトの「師 *maistresse*」となり、よく養われたので、ベルトは非常に見事なフランス語を話していた(*Histoire de la Reine Berthe et du Roy Pepin, Mise en prose d'une chanson de geste*, Edition critique par Piotr Tylus, coll. <Textes Littéraires Français>, n° 536, Droz, 2001, p.132). このような設定は、ベルトのマルジストに対する従順さとマルジストらによる裏切りの残虐さをより明確に理由付け、ベルトとマルジスト達の関係により一層の整合性を与えようとした工夫であると推測される。

- (9) Cf. Doris Desclais Berkvam, *op.cit.*, p.46.
- (10) Régine Colliot, *op.cit.*, p.201.
- (11) Cf. 拙稿, 前掲論文, pp.38-40.
- (12) Cf. 同論文, pp.36-38.
- (13) Cf. Jens N. Faaborg, *Les Enfants dans la littérature française du Moyen Age*, coll. <Etudes Romanes>, n° 39, Copenhagen, Museum Tusulanum Press, 1997, p.53.
- (14) Didier Lett, « L'enfant dans la chrétienté (V<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles) », in Danièle Alexandre-Bidon, Didier Lett, *op.cit.*, p.103.
- (15) Cf. Doris Desclais Berkvam, *op.cit.*, p.120.
- (16) *Ibid.*, p.120.
- (17) Cf. 「(私) **継母**が一人いました, 神様が彼女を破滅させて下さらんことを! / **継母**はいつも私を大層酷く痛めつけました, / 拳や足で何度も何度も; / それにはもう耐えられませんでした, そのようなことを私は望みませんでした, / (私は) 先日彼らの下から逃げ出しました」(vv.1198-1202) (ベルトがシモンに語った偽りの身の上話)。「気を落とさぬように; / 貴女の**継母**は貴女を打ち, 虐待しました, / 知っておくのです, 彼女は悪しき人, 忌々しい人として振舞ったのです, / 神が彼女にそのことで更に報いて下さるでしょう, あらゆる罰を, そう知っておくのです; / 悪しき**継母**の愛は非常に小さなものなのです」(vv.1341-1345) (悲しみに沈むベルトを励ますコンスタンスの言葉)。
- (18) Régine Colliot, *op.cit.*, p.241.
- (19) *Ibid.*, p.201.
- (20) Cf. *Ibid.*, pp.142-152, pp.154-159. コリオ(1970)は, 異本の中にはシモンを「森林管理人 *forestier*」と明言するものがあることを指摘している(*Ibid.*, p.159). なお, シモン一家の貴族的印象に関しては上記の注(2)も参照のこと。
- (21) Cf. Doris Desclais Berkvam, *op.cit.*, p.132.
- (22) Cf. Didier Lett, *Famille et parenté dans l'Occident médiéval, V<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècle*, coll.<Carré Histoire>, n° 49, Hachette, 2000, p.167.
- (23) *Ibid.*, pp.171-172.
- (24) マルジストは, 「聖リシエ」(v.313)や「聖クリマン」(v.2034)の聖体, 「聖処女」(v.461), 「(預言者)ダニエルを創られた神」(v.2065)にかけて誓ったり, 「神と聖ペテロ」(v.353)や「聖ドゥニーズ」(v.1823)に祈願したり, 「率直さに満ちた真の王である神」(v.1824)に問いかけたりする(Cf. Régine Colliot, *op.cit.*, pp.214-215). なおマルジストの娘の名

アリストは洗礼において名付けられたものである(vv.2221-2222).

- (25) 物語中でベルトはまず「ハンガリー王の娘」(v.108)として認識され、その後「父フロワール王」という表現が繰り返される度に、彼女の属する社会的階級は再確認される。このように「子の社会的階級を表す存在である」という役割は父親が担うものなのである。Cf. 拙論, 前掲論文, p.39.
- (26) Cf. 同論文, p. 39, p.43.
- (27) Didier Lett, « L'enfant dans la chrétienté (V<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles) », in Danièle Alexandre-Bidon, Didier Lett, *op.cit.*, p.105.
- (28) Albert Henry, « Introduction », in Adenet le Roi, *Berte as grans piés*, Edition critique par Albert Henry, coll. <Textes Littéraires Français>, n° 305, Droz, 1982, pp.34-35. Cf. 拙論, 前掲論文, p.36.
- (29) Régine Colliot, *op.cit.*, p.241.

#### 使用テキスト

Adenet le Roi, *Berte as grans piés*, Edition critique par Albert Henry, coll. <Textes Littéraires Français>, n° 305, Droz, 1982. 本テキストにおける指摘箇所, 引用箇所に関しては, その後に行数のみを記すことにする。なお, 引用中の丸括弧は引用者による補足, 太字は引用者による強調である。

#### 引用文献

- ALEXANDRE-BIDON, Danièle, LETT, Didier (1997), *Les Enfants au Moyen Age, V<sup>e</sup>-XIV<sup>e</sup> siècles*, coll. <La Vie Quotidienne>, Hachette.
- BERKVAM, Doris Desclais (1981), *Enfance et maternité dans la littérature française des XI<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles*, coll. <ESSAIS>, n° 8, Champion.
- COLLIOT, Régine (1970), *Adenet le Roi « Berte aus grans piés »*, *Etude littéraire générale*, 2 vols, Editions A. et J. Picard.
- FAABORG, Jens N. (1997), *Les Enfants dans la littérature française du Moyen Age*, coll. <Etudes Romanes>, n° 39, Copenhagen, Museum Tusulanum Press.
- HENRY, Albert (1982), « Introduction », in Adenet le Roi, *Berte as grans piés*, Edition critique par Albert Henry, coll. <Textes Littéraires Français>, n° 305, Droz, pp.9-54.
- Histoire de la Reine Berthe et du Roy Pepin, Mise en prose d'une chanson de geste*, Edition critique par Piotr Tylus (2001), coll. <Textes Littéraires Français>, n° 536, Droz.
- LETTE, Didier (2000), *Famille et parenté dans l'Occident médiéval, V<sup>e</sup>-XIV<sup>e</sup> siècle*, coll.<Carré Histoire>, n° 49, Hachette.
- 川口陽子(2005), 「アドネ・ル・ロワ『大足のベルト』における母親観——(1)母親達の役割」, 『年報・フランス研究』第39号, 関西学院大学フランス学会, pp. 35-47.

(文学部非常勤講師)